様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：１３８０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2018
課題番号：２６８７０５３５

研究課題名（和文）いじめ,ネットいじめ発生に対する意識とコーピングにおける6カ国比較研究

研究課題名（英文）Adolescents' Perceptions and Coping with Bullying and Cyberbullying: A Cross-Cultural Examination among six countries

研究代表者
青山　郁子（Aoyama, Ikuko）

静岡大学・国際連携推進機構・特任准教授

研究者番号：６０５８６８０８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：近年、子どもたちがいじめに対し効果的な対処法を身につける重要性が議論されている。しかし、子どもたちのコーピングに影響を及ぼす諸要因（例：いじめ発生に対する因果関係の信念や感情プロセス）が見過ごされている。例えば、自分に悪いところがあるからいじめられるのは仕方ないと思っている生徒は、非効果的に対処し、それ故、被害が続いていく可能性がある。さらに、様々なタイプのいじめが発生する社会的文脈において生じる感情やコーピングは同じではない。したがって、本研究課題では異なる発生状況における、因果関係の信念、感情プロセス、コーピングの差異を詳細に検討し、６ヶ国間で比較を行い6本の学術研究論文を発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ネットいじめは従来の対面式のいじめとは異なる「新しいタイプのいじめ」として研究がされてきたが、実際は２つのタイプのいじめは延長線上にあると指摘されている。実施に、本課題の一連の研究でも明らかになったように「ネット上か対面式か」というよりも、いじめが起こった際の可視性（多くの人が目撃できる状態で起きたのか否か）が、被害者の感情やコーピングプロセス、帰属意識に影響を与えることが明らかになった。これらのことから今後の予防対策においては、傍観者の役割を学校現場で伝えていく重要性が示されたと言える。

研究成果の概要（英文）：Researchers have emphasized the importance of providing adolescents with successful coping strategies to reduce their involvement in bullying behaviors. However, various factors (e.g., attribution, belief) that influence their coping strategies are often overlooked. Moreover, bullying can happen in different social contexts and adolescents' emotions to each context will vary. Therefore, the study investigated the differences in adolescents' attributions, emotional processes, and coping strategies for face-to-face victimization versus cyber victimization. This is also cross-cultural study and the results were compared between six countries. In total, six research papers are published at international journals.

研究分野：教育心理学

キーワード：いじめ　ネットいじめ　国際比較　コーピング

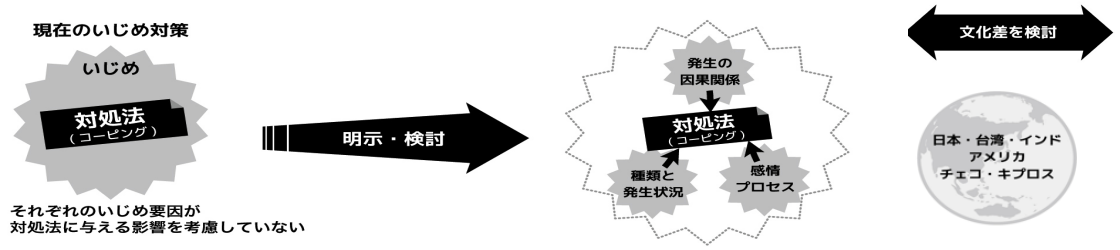
様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

青年期の初期（11-14 才）は従来型の対面式いじめ･ネットいじめともに、発生件数が多い時期であり（文部科学省,2012)、過去多くの研究が行われてきた。2013 年 6 月に成立した「いじめ対策推進基本法」により、各学校はいじめ防止への取り組みが求められている中で、近年、子どもたちがいじめに負けないよう、効果的な対処法（＝コーピングストラテジー）を身につける重要性が議論されている。

しかし、子どもたちのコーピングに影響を及ぼす他の要因（例：いじめ発生に対する因果関係の信念や生起する感情プロセス）が見過ごされている。例えば、自分に悪いところがあるからいじめられるのは仕方ないと思っている被害者は、非効果的に現状を対処し、それ故、被害が続いていくというネガティブサイクルに陥ってしまうのではないか。また、いじめられたことに対して生起する感情が怒りか悲しみかによっても対処法は異なってくるだろう。さらに、様々なタイプのいじめが発生する社会的文脈、例えばいじめが大人数の前で起きたのか、それとも加害者が分からない状態で隠れて起きたのか、といった異なる状況において生じる感情やコーピングは同じではない（Wright & Li, 2013)。

したがって、異なる発生状況における、因果関係の信念、感情プロセス、コーピングの差異を詳細に検討するとともに結果を多国間で比較するために研究に着手した。



２．研究の目的

本研究の目的は以下の 3 点であった。

① いじめ発生の因果関係に対する考えと生起する感情プロセスが、どのように被害者のいじめコーピングに影響を与えるか調査する。

② いじめが発生する異なる社会コンテクストにおける、いじめに対する深刻度の認識と上記の感情プロセスとの関連を明らかにする。

③ 上記のようなプロセスが文化的背景の違いによってどのように異なるか理解する。そのため、文化背景や教育システムが大きく異なるアジア･ヨーロッパ･アメリカ（日本、中国、インド、アメリカ、チェコ、キプロス）の 6 カ国からの青年を対象に調査し国際比較する。

３．研究の方法

各国の公立の中学生を対象に質問紙調査を行った。計 3,432 名（うち日本　= 460 名, 中国 = 673 名，キプロス = 470 名，チェコ= 537 名，インド = 480 名，アメリカ= 812 名）.

質問項目は各国共通で､日本語版は英語･日本語ともに堪能な 2 名でバックトランスレーションの手順を踏まえた。

まず従来型の対面式いじめ･ネットいじめの被害･加害経験の頻度についての質問をした。次に他人の目の前で起きた対面式いじめ･ネットいじめ､それぞれの状況が記された短いシナリオ文章を読み、各状況に対して、①いじめの原因は何か（例：いじめられる方が悪いのか、いじめる方が悪いのか)、②どのように感じるか（怒り、悲しみ等)、③自分ならどうするか（友達に相談する、気ににしないようにする、何もしない等）の 3 点について質問した。

その他、いじめが起きた場合のコーピング行動、帰属意識、いじめに対する深刻度の認識、個人主義 vs 集団主義の意識などについても質問した。

分析は *Mplus* 7.4. を使用して主にマルチレベルでの分析を行った。

４．研究成果

いじめの被害にあった際の帰属原因としていじめが発生したコンテクストによって異なることが明らかになった。具体的には、いじめがパブリックな形で多くの聴衆の目の前で起きた場合に、被害者はより自己非難、加害者非難を選択する傾向が全体でみられた。しかし、国ごとの交互作用も見られ、帰属原因意識には文化差の影響も大きいことが示唆された (Fig.1)。

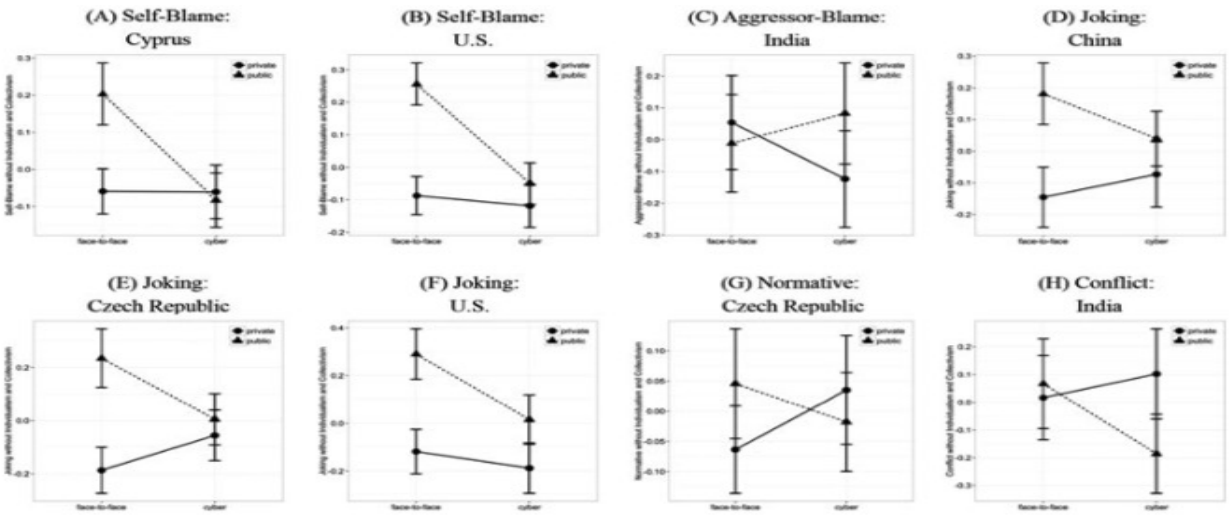


Figure 1. Graphical representation of the interaction between medium (face to face, cyber) and context (public, private) for boys: Partial interaction plots controlling for individualism and collectivism and including 95% within-subject confidence interval.

またいじめに対する深刻度の認識が高さと、生起するネガティブな感情（いかり、悲しみ、恥ずかしさ）との関連が明らかになった。しかし、この傾向はインドには当てはまらず、いじめやネットいじめに対する意識は一般的に先進国の方が高いという指摘(Ortega et al., 2012)を支持するものとなった。日本、中国、インドのアジア３カ国における比較でも、インドはいじめの加害・被害、そして加害・被害の両立場にいる生徒ともに日本よりも多く、友人関係において問題があることも明らかになった。

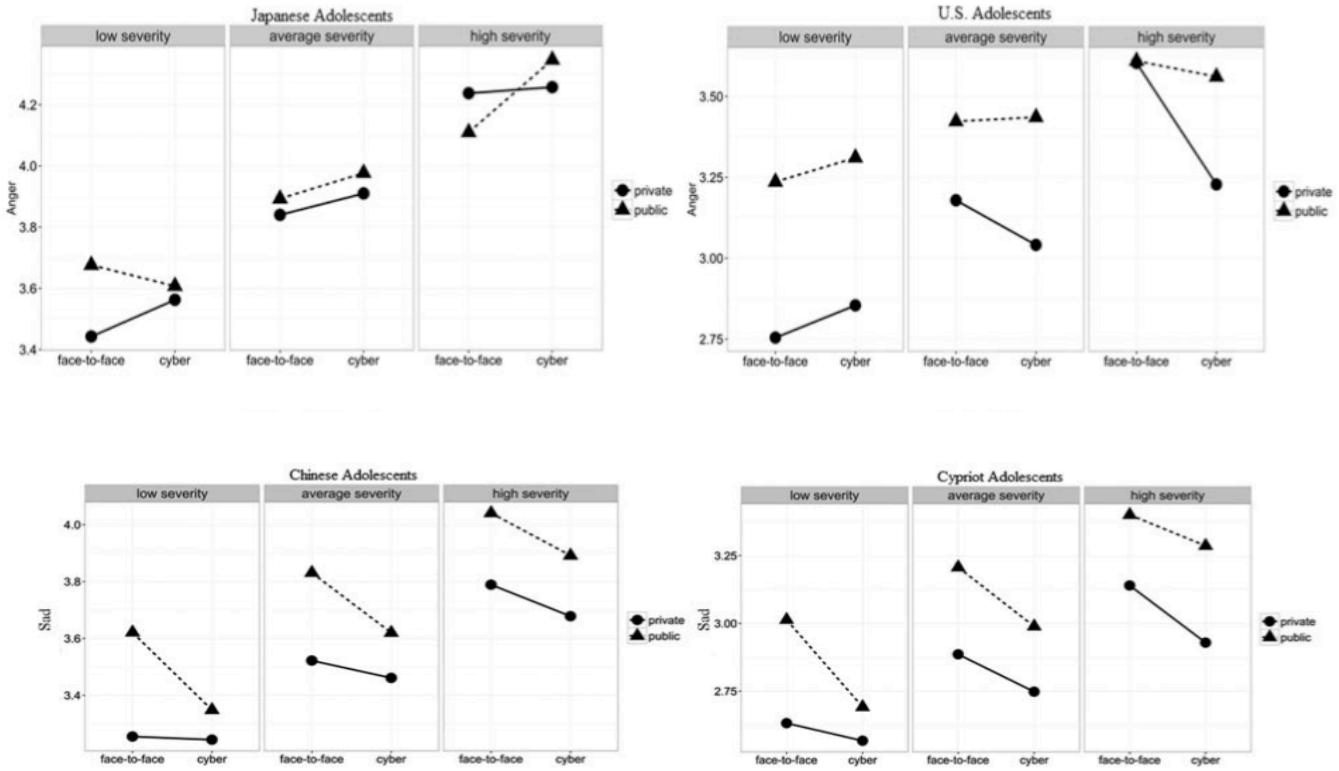


Figure 2. Graphical representation of the three-way interaction among severity, medium (face-to face, cyber) and publicity(public, private): Model-implied means while controlling for gender, individualism, and collectivism.

さらに、いじめに対するネガティブな感情（いかり、悲しみ、恥ずかしさ）は、それが起きた際の可視性と関連がみられた。すなわち、いじめが起きたのが対面式かネット上であるかというよりも、その被害が多くの聴衆の目にも明らかになったか否かがほとんどの国の生徒たちにとって重要な要素であることが示された。しかし、それぞれの国でユニークなパターンが見られ、予防介入の取り組みにおいては文化・社会的な背景を十分考慮したものである必要があることが改めて示された(Fig.2)。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　６　件）

1. Wright, M. F., Yanagida, T., Machackova, H., Dedkova, L., Sevcikova, A., Aoyama, I.,Bayraktar, F., Kamble, S. V., [G]Li, Z., [G]Soudi, S., Lei, L., & Shu, C. (2018). Face-to-face cyber victimization among adolescents in six countries: The interaction between attributions and coping strategies. *Journal of Child and Adolescent Trauma. 11(1),* 99-112. https://doi.org/10.1007/s40653-018-0210-3 査読有り

2. Wright, M. F., Yanagida, T., Aoyama, Ikuko., Ševčíková, A., Macháčková, H., Lenka Dědková, L. et al (2017). "Differences in Severity and Emotions for Public and Private Face-to-face and Cyber Victimization Across Six Countries." *Journal of Cross-Cultural Psychology, vol48(8)*,1216-1229. https://doi.org/10.1177/0022022116675413　査読有り

3. Aoyama, Ikuko., Yanagida, T., Wright, F. M. (2017). "Emotional responses to bullying among Japanese adolescents: Gender, context, and incidence visibility." *International Journal of School & Educational Psychology*，6:2, 90-98. http://dx.doi.org/10.1080/21683603.2017.1291388 査読有り

4.Wright, M. F., Yanagida, T., Ševčíková, A., Aoyama, Ikuko., Dědková, L., Macháčková, H. Li, Z., Kamble, S. V., Bayraktar, F., Soudi, S., Lei, L., & Shu, C.(2016). "Differences in Coping Strategies for Public and Private Face-to-face and Cyber Victimization among Adolescents in Six Countries." *International Journal of Developmental Science. vol. 10, no. 1-2,* pp. 43-53 *DOI: 10.3233/DEV-150179* 査読有り

5. Wright, M. F., Yanagida, T., Aoyama, Ikuko., Dědková, L., Li, Z., Kamble, S. V., Bayraktar, F., Ševčíková, A., Soudi, S., Macháčková, H. Lei, L., & Shu, C. (2016)."Differences in Attributions for Public and Private Face-to-face and Cyber Victimization among Adolescents in Six Countries." *Journal of Genetic Psychology. 178(1),*1-14. *http://dx.doi.org/10.1080/00221325.2016.1185083*　査読有り

6. Wright, M.F., Aoyama, Ikuko., Kamble, S.V., Li, Z., Soudi, S., Lei, L., Shu, C.(2015). "Peer Attachment and Cyber Aggression Involvement among Chinese, Indian, and Japanese Adolescents." *Societies, 5,* 339-353.　査読有り

〔学会発表〕（計　３　件）

1. Wright, F., W., Yanagida, T., Aoyama, I., et al. *Perceptions of Severity and Attributions for Public and Private Peer Victimization among Adolescents in Six Countries.* The Society for Research in Child Development (SRCD). 2017 年 4 月

2. Wright, F., W., Yanagida, T., Aoyama, I., et al. *The Role of Severity in Coping with Public and Private Peer Victimization among Adolescents in Six Countries.* The Society for Research in Child Development (SRCD). 2017 年 4 月

3. Aoyama, I., Yanagida, T., & Wright, M. F. *Adolescents' emotional response to hypothetic victimization incidents: Role of context and visibility of incidents.* Presented at the 20TH WORKSHOP AGGRESSION 2015, Linz, Austria. 2015 年 11 月.

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：Michelle F. Wright
ローマ字氏名：Michelle F. Wright

研究協力者氏名：Yanagida Takuya
ローマ字氏名：Yanagida Takuya

研究協力者氏名：Fatih Bayrakta
ローマ字氏名：Fatih Bayrakta

研究協力者氏名：Anna Sevcikova
ローマ字氏名：Anna Sevcikova

研究協力者氏名：Shanmukh Kamble
ローマ字氏名：Shanmukh Kamble

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。